

源造の枕元から線香の煙が細く長く流れてくる。芙美はその煙の行方を目で追いつながらかすかに微笑んだ。涙を見せるよりもっと深い悲しみが伝わってくる。はかない表情だった。

まもなく手伝いの人や社員が駆けつけてきた。慌ただしく通夜の準備が始まり、そのうち芙美も本来の落ち着きを取り戻して、動き回る人々の中でテキパキと指図を始めた。

その姿を確かめてから、志津に知らせるために栄子はあかつき荘に戻った。

「そう、亡くなったの。知らせてくれてありがとう」

通つて火葬場へと向かった。

出棺のときに見かけなかった志津の姿を、栄子はあかつき荘の前で見つけた。焼香にきたあとすぐに引き返したのか、喪服から艶やかな訪問着に着替えている。精いつばい美しく装つて笑顔で源造を見送ることが、志津が源造のために用意した別れの儀式に違いない。徐行する車に向かって軽く頭を下げる志津の姿が、栄子に一つの愛が終わったことを告げていた。

初七日、四十九日の法要も終わり、ようやく一息ついたとき、芙美があかつき荘に栄子を訪ねてきた。栄子がここに引越してきてから初めて

志津もまた冷静に源造の死を受け止めたようだった。ショックで倒れるかもしれないと心配していた栄子が、呆気にとられるほどの無表情だった。

しかし、栄子がドアを閉めたとたん、志津の絞り出すような泣き声が聞こえてきた。芙美の静かな悲しみに比べ、今までの思いを一挙に吐き出してしまふような激しさがあつた。

栄子は、足音を消してその場を離れた。

源造の葬儀は急きよ帰国した息子たちによつて盛大に執り行われた。霊柩車は源造が愛した吉祥寺の町をくまなく回り、あかつき荘の前を

のことである。

「栄子さん、いろいろありがとう。あなたがいてくれて本当に助かったわ」  
頬にかすかなやつれを残しているが、芙美は元氣そうだった。  
「いいえ、ただうろろろするだけで、かえつて邪魔になつたのではないかと心配してたんですよ」  
「嫁たちとは馴染みがないものだから、栄子さんばかりを当てにしまつて、息子から叱られてしまつたわ」

栄子の出した玉露茶を飲み干して、芙美は思いがけない話を切り出した。

「長男の司郎が、アメリカに来ないかって言う

のよ。お母さんを一人で置いておくのは心配だからって」

「いい話じゃないですか。司郎さんは子供の頃からお母さん思ってたから」

「でも、私は断るつもり。いまさら外国で暮らすっていうの大変だし、まして嫁と同居なんて気が重いよ。それで、栄子さんに家へきてもらえないかと思つて」

栄子は耳を疑つた。息子が二人もいるのに、どうして姪の自分に同居を頼むのか、芙美の考えが分からなかった。

「でも、私はここで今まで通り管理人をするつもりなんです。もちろん、伯母さんのところにも

源造と新婚生活を送つた、芙美にとつても思い出のあるあかつき荘である。源造がここをいつまでも残しておくつもりだったことも知っているはずだ。それなのに、突然の芙美の言い分が信じられなかった。

「そうね、源造はこの土地だけは絶対に売らないつて言つてたわね。土地を転がして事業を大きくしてきた源造が、いくら現金を積まれても手放さなかつた」

「それは、このあかつき荘が実業家としてのスタートだったし、伯母さんとの新婚時代の思い出があるからです」

「そう、確かに私にとつても思い出のある建物

今まで以上に顔を出そうと思つています」

訝る気持が顔に出ていたのかもしれない。

「栄子さん、話が逆になってしまったけど、私はこの土地を手放すことにしたの。だから、栄子さんの仕事はなくなるのよ」

芙美の声が突然高くなった。芙美の変化に戸惑い、圧倒されながらも栄子は反論した。

「ちよつと待つてください。ここを手放すつてことはあかつき荘を壊すことなんです。伯父さんが大切にしていた建物なんです。伯父さんが亡くなったからといってすぐに壊すなんてひどいと思ひます」

思わず咎める口調になった。

「でも、それ以上に憎くてたまらない建物でもあつたのよ」

「そんなこと……」

「源造が私より先に死んだら、すぐに私の手で処分しようと思つていたの。今日まで長かつたわ。源造が寝込んだときから、今までずっとそのことだけを考へていたの。私がどうしてそこまで考へたか、栄子さんには分かるでしょう」

いつものおっとりした芙美からは想像もできない激しい言葉だつた。

あのときの栄子と源造の会話を聞いていたのだろうか。それにしても、今になってどうこういう話ではない。

「伯母さんは矢島さんのことを言っているんですね。でも、それは十年以上も前のことなんですよ」

「いいえ、私にとっては二十年前から今までずっと続いていることなのよ」

「えっ、そんな前から……」

思ってもみなかった芙美の言葉に、栄子は口をつぐんでしまった。

重苦しい空気が二人を包んだ。

何を言えがいいのかと言葉を探している栄子と、

そんな栄子をじつと見つめる芙美の冷ややかな目。

芙美は栄子をも志津側の人間として憎んでいる

のかもしれない。

気まずい時間が流れた。そして、その沈黙を破ったのは芙美のほうだった。

「栄子さんはこの一年あかつき荘の管理人としてよくやってくれたわ。あなたが源造の遺志を継いでここを守っていくつもりなのも分かっていた。だから、私は栄子さんにあかつき荘を処分する理由をはつきり説明しておかなくてはと思っ

ているの。今日ここへきたのはそのためなのよ」  
芙美は、聞いてくれるかしらと栄子の目を覗き込んだ。

「聞かせてください。あかつき荘が伯母さんにとつてどんな建物だったのかを知っておきたいと思

芙美が自分をあかつき荘の管理人として認めてくれたことが、栄子の気持ちをふつと軽くした。これで素直な気持ちになって芙美の告白を聞くことができる。

芙美は栄子が入れ直したお茶を一口飲んで目を細めた。湯飲みを両手で包み込み、そのままの姿勢でじつと湯飲みを見つめている。

やがて芙美は湯飲みを置いて顔を上げた。  
そして、胸の中の思いを一気に吐き出すように、熱い口調で栄子に語りかけた。

源造が私のことをどういう風に言っていたか言

ひつ込み思案でおとなしくて、夫が外で何をしようと思ったく文句も言わない女。家の中にいて家事と子供の世話をすることが生がいで、経済的にも精神的にも十分満たされた幸せな女。

どう、当っているでしょう。  
栄子さんから見てもそういう女に見えたでしょうし、誰もがそう信じていたわ。  
でも、それは源造が望んでいた妻の姿。そして、私はそれに従っていただけ。

本当の私は人一倍独占欲や嫉妬心が強い女なの。それを表面に出さなかったのは、源造の妻という座を失いたくなかったからよ。私は虚栄

心のために自分の本心を隠して生きてきたの。

世の中には私が演じてきた通りの妻で、十分幸せな女の人もいるでしょう。夫の愛を信じてることができて、共に家庭を築いているという確信があれば、どんな環境にあっても女は幸せなものだわ。

でも、私は一度も自分を幸せだと思つたことはないの。

それは、源造が私を女として見てくれたことがないから。妻であつても女ではないなんて悲しいことだわ。私達夫婦って、初めからそういう関係だったのよね。

源造があかつき荘を建てたとき私を呼んだの

は協力者が必要だったからなのよ。別に私で

なくても誰でもよかったの。ここにきてすぐそれが分かつたけど気にしなかつたわ。今から二人で働いて家庭を築いていくっていう夢があつたし、源造の役に立てるってことが嬉しかった。

外へ出歩くことの多い源造に代わつてあかつき荘を守つてきたわ。子供が二人産まれてからも管理人の仕事を疎かにすることはなかつた。体を動かすことが好きだったし、喜びでもあつたのよ。

(以上12月30日放送分)